

稲田家臣団の静内郡移住について

7月26日(木) 13:00~14:30 札幌会場

8月2日(木) 13:30~15:00 東京会場

講師 山田 一孝 静内郷土史研究会会長・静内神社宮司

皆さんこんにちは。ご紹介をいただきました山田でございます。このセミナー講師のメンバーを見ますと、専門家の方ばかりで、私のような素人が出る場面ではないのかなというふうにも思いますが、私も、ただ好きだということだけで郷土史の調査などをずっとやっています。その中で、静内町のアイヌ民族についての調査を行ったことがあります。既に亡くなられた織田ステノさんや葛野辰次郎さんというような方の聞き取り調査をしたこともあります。また、一時、静内町にありますアイヌ民族資料館の解説資料の製作をしたこともあります。ただ、私ももう還暦を過ぎておりまして、30年近く前の若い時代の話です。今回の講師の話は、私の仲間が札幌のアイヌ民族文化研究センターにいますし、地元にある静内郷土館の学芸員がよく財団の方にも来ているようなので、その辺から私の名前が出たのかと思っていたのですが、先ほど伺いましたら静内郷土館のホームページに出ていたからだと聞きました。ちよくちよくいろいろなホームページは覗いているのですが、地元のホームページは見ていなかったのが気がついていませんでした。そんなことで、話のまづいところは我慢していただき、時間までお付き合いいただきますようお願いしたいと存じます。

なお、この度、静内町は隣の三石町が合併して、新ひだか町という名前の町になりました。旧静内町は人口2万2,000人ぐらいで、これに新冠町と三石町が合併して、あわよくば市ということも考えられていたのですが、新冠町が途中で合併協議会から離脱しまして、三石町だけの合併となり人口2万7,000人ぐらいの町になりました。私は、静内生まれの静内育ちということで、静内町と言うのがくせになっておりますので、今日は「静内」ということで通していきたいと思いますのでご承知おきをいただきたいと思います。

稲田家臣団の静内移住から、既に135年余りたっております。当然、当時の様子を知っている人で存命の方はおりません。私にとってみればそれはもうけの幸いで、今まで調査してきた文書だけを基に、見てきたように話をしたいと思います。

もう2年くらい前ですが、東映の映画で「北の零年」という、吉永小百合さんと渡辺謙さんが共演した映画がありましたが、ご覧になった方もいらっしゃると思います。私も舞台背景というか、そういうところで協力を求められ、先方の質問に答える形で、いろいろ資料をかき集めて渡したりといろいろ協力したのですが、ほとんど

使われませんでした。

例えば、船が遭難したという便りが来て、空を見上げて皆が泣き出すというシーンがありました。あの手紙の原文が残っているわけではありませんが、東映のプロデューサーから「何とか文章を作ってよ」と頼まれて、私が想像して文を作ったのですが、生かされたのは最後の合掌だけでした。これには私もがっかりしました。

映画ですから、おもしろくなければ観ていただけません。例えば、映画の中にアイヌの人たちが出てくるシーンが非常に少なく、アイヌの格好をしているのは2人だけで、しかも、そのうちの1人はアイヌの格好をしているけれど実は会津出身で箱館戦争から脱走した人でした。最初、静内のアイヌの人たちがどんな着物を着ていたか調べると言われ、背中についている模様まで調べたのです。本来、あのように刺繍が入った着物は儀式用のものです。それから頭に模様の入った鉢巻のようなものをつけていましたが、少なくとも静内方面のアイヌの男性がああいうものをつける習慣はなかったということに分かっているのです。しかし、それでは格好がつかないということであらようになってしまったのです。この他にもいろいろありますが、映画の話になると今日の話の本筋から外れてしまいますので終わりにします。

静内町では、現在、商業、漁業、農業などいろんな産業がありますが、何と言っても競走馬の産地として皆さんもご承知だと思います。地場産業の振興ということで、役場の職員の机の上に競馬新聞が置いてあっても上司から咎められないというような町です。馬券の発売場も町の中にあります。競走馬の産地ということの他、春の桜、二十間道路の桜並木ですが、幅が二十間で距離が7kmの真っすぐに伸びた道路の両側にエゾヤマザクラが咲くということで、観光名所の1つになっています。

そのような町ですが、歴史的なことを申し上げますと今日の題名にもなっています稲田家臣団が明治4年に移住してから、本格的な開拓が始った町です。

皆さんのお手元に資料として『北海道移住回顧録』をお渡ししています。これは私どもの郷土史研究会で出したもので、静内の郷土館で500円で売っているものです。今日は差し上げますので、お持ち帰りいただきたいと思っています。今日の話は、これをもとにして進めていきたいと思っています。

この『北海道移住回顧録』の原本は、B5版の非常に質の悪い原稿用紙に草書体で書かれた非常に読みにくい文章です。過去の静内町史の編さんの時に、あちこち引

用されているのですが、読めないところは全部飛ばして、上と下をつなげたりしているのです。こう言うと先輩に怒られるかも知れませんが、非常にいい加減な代物です。

最新の静内町史を編さんする時には、私も編さん委員としてお手伝いをして、そのあたりは全部直したつもりです。古い静内町史を読んで、これはいかんと思って原本を当たったのですが、字がかすれて見にくいということの他、候文と言いますが、今の文体とも違いますし、字はみんなくずし字なのです。そのため読めなかったのだと思います。私は大学時代に古文書学を一度とったのですが、北海道の文章は出てこないのです。家康が書いた文章が出てきても、北海道出身の者にとっては何の役にも立たないので、可でも可だということで専門的な勉強はほとんどしなかったのです。それが、静内へ帰ってきてこういうことをやらざるを得ないことになって、ほとんど独学で文書を読みました。

この『北海道移住回顧録』は岩根静一という人が書いたものですが、前の静内町史には全く違う人の名前が記載されていました。普通、原稿用紙を使う時は、最初にタイトルを書いてその下に自分の名前を書くと思いますが、この『北海道移住回顧録』の原稿からその名前の部分が切り取られて、欠落しているのです。そのため、別な人の名前が記載されたのです。

全文を読んで、岩根静一という方が書いたものということが初めて分かりました。あちこち探してみると、この人の関連した歴史的な事実とか、他の文書というようなものも出てきました。今日は、この『北海道移住回顧録』によって、静内における明治4年以降の開拓の様子を見ていきたいと思います。それまではアイヌの人と少数の漁場の関係者しかいなかったのです。それも、漁場のシーズンには本州から出稼ぎのような形で人が入ってくるのですが、冬を迎えるとみんな帰ってしまって、ほとんど番人しか残らないというような状況だったのです。そうしたところに、本州から数百人も人間が集団で移住してくるという状況が生まれたのです。

まず、稲田家臣団とは何ぞやということですが、徳島藩、藩主は蜂須賀家です。この徳島藩の領地には淡路島もありました。この淡路島を管理するために城代家老が置かれていたのですが、この城代家老を代々務めていたのが稲田家です。この稲田家の先祖は、秀吉の時代まで遡るのですが、蜂須賀小六の兄弟分で、小六が秀吉から領地をもらった時に客将というか、独立した大名としてではなく、蜂須賀家の家老に甘んじたのです。代が下がってくると、そうした事実が分からなくなり片一方に不満が出てきます。なぜかという、大名の直属の家来と、その又家来とでは全く格が違っていたのです。明治維新になり、俸給を10分の1に減らされるという大変な事態に立ち至ります。この時、千石も1万石ももらっていたら、10分の1に減らされても食うには困らないのですが、又家来はそんなにももらっていないので、10分の1に減ら

されては食うこともできなくなったのです。そこで、稲田家の家臣は独立分派運動を起こすのです。稲田家が蜂須賀家の家来ではなく藩主になれば、又家来ではなく大名直属の家来になれるのです。そのため、稲田家が蜂須賀藩から独立する運動を起こしたのです。それが本藩である蜂須賀藩から疎まれ襲撃を仕掛けられます。この時、死者も出てしまいます。朝廷はこれをこのままにしているといつまでも騒動が続いてしまうということで、これを分けることとし稲田家には北海道への移住を申し付けたのです。そうしたことが静内に移住してきたということの背景にあります。

船で静内に移住してきたのですが、岩根静一の資料によると、汽船3隻に分乗して明治4年4月13日に淡路の洲本城下の海岸を出発したとあります。そして、16日に東京に品川湾に着いて、5日間東京見物をしています。これはもう恐らく、二度と来れないだろうという覚悟があったと思います。その後、品川を21日に出帆して浦賀に1泊しています。その次は、26日に金華山沖で波が静まるのを待って、30日にやっと北海道の恵山の沖を通過して、5月1日に静内の沖に着いたということになります。このあたりが「北の零年」の冒頭のシーンにもなっています。今は非常に便利になって飛行機でひとつ飛びという時代ですが、当時は船の旅なので大変だったと思います。その船も今のフェリーのように安定した航行ではないわけですし、狭い船室にたくさんの方が詰め込まれて、人間だけではなく、米とか食料や衣料、それから開墾のための土木工事の道具などの貨物も満載してきているので、本当に大変な旅だったと思います。

移住してきた人たちのほとんどが武士階級か半士半農という人だったのですが、農業の専門家もいなければならぬということで、領地の中にいた専門家を10人くらい連れてきています。

この人たちが3隻の汽船に分乗してきたのですが、船隊を組んで一緒に来たわけではなくて、出発の時刻と到着の時刻はずれていたようです。1番船は大阪丸、2番船が大有丸、それから3番船が鍋焼丸、鍋焼丸って変な名前ですが、文書をどう読んでもこうしか読めないのです。「北の零年」に登場したのは2番船の大有丸です。

ちょっと前に、芥川賞作家の池澤夏樹さんが『静かな大地』という単行本を出版しています。これは朝日新聞に1年間連載されたものです。その池澤さんから先日、今度『静かな大地』を文庫本にして出版することになったというメールが届きました。もともと厚いあの本が文庫本になるとどんなことになるのかと心配していますが、この本は日高の開拓をテーマにして、地元のアイヌの人たちとのいろいろな関わりというようなことが非常によく書かれているものです。近いうちに出版されると思いますのでご一読いただければと思います。

明治4年の夏に137戸、546人が静内に移住したというふうにされています。上陸した場所には現在記念碑が

建てられています。船首部分をイメージした石碑で、丸い穴があいているのですが、製作者によるとその穴を覗くと淡路島が見える、見えるはずはないのですがそっちの方向を向いているということです。

この稲田家臣団の移住者の名簿ですが、明治4年の4月までに移住した人の名簿と、明治5年になってから作られた壬申戸籍というものがあるのですが、全員の分は残っていません。この戸籍は、静内の本沢地区の移住者についてのものなので、大半は載っているものの一部欠落していて全員の名前は残っていないのです。また、名簿に記載されていても、東京の稲田邸寄留とか淡路の国何々郡寄留ということで、実際に静内に来ている人も含まれているのです。

なお、壬申戸籍には当時の静内町のアイヌの人たちの名簿もあるのですが、アイヌ名ではなく和名で記載されています。この時に名前をつけさせられたのだと思いますが、誰なのかということ調べるのは非常に難しいということがあります。この他に静内には慶応年間のものを含めて4種類の名簿が残っています。当時の戸籍にあたるものですが、これにはアイヌ名の名前がカタカナで書かれています。中には、これはうちの先祖だとわかる人もいます。

映画の話で恐縮ですが、「北の零年」では、その名簿がないということで、悪徳商人が偽の名簿を作って米をせしめて、それを稲田家に売って自分は成り上がって、村の戸長になるというストーリーがありました。実際には名簿がありましたし、そんな方法で戸長になれるほど甘い時代ではなかったと思います。あれは全くの創作です。明治10年という時代を想定して、ああいうストーリーを展開するのですが、この明治10年という時代は、ちょうどいろいろと転換期にあって資料があまり残っていないのです。そのためうそをつくにはちょうどいい年代なのです。

『北海道移住回顧録』の最初の方を読むと、海上から陸を眺めると、日高山脈の山に白い雲がかかっているように見えますとあります。南国から来ているので、まさかそれが雪だとは思わなかったのです。船の中が寒くなったので、綿入れを出したり、重ね着をしたりと寒さを防ぐために大騒ぎしているところへ、岸の方から丸木舟に乗った人が船に近寄って来ます。その人を見ると、おこそずきを被っているように見えて、さすがにこの寒いところの人間は違うなと思って見ていた、ところが、おこそずきのように見えたのは長く伸ばした髪の毛と髭であったという状況が書かれています。しかも、船に近寄って来た人は丸木舟を漕いできて暑いので、上半身が裸なのです。それを見て移住者たちは、自分達は寒いと感じているのに、何とすごいところだとびっくりしたと書かれています。

文章なので誇張されている面が当然ありますので、それを割り引いても、5月といえば淡路では初夏を迎えて

暑い時期になるという所から北海道に来た人たちにとっては、全く別な世界に来たと感じたと思います。上陸しても、まだ住む家もないのです。そのため、女子供は砂浜にうち伏して泣き叫んだと書かれています。

ところが、この後には、泣くに泣けない事件が続いて起こります。今申し上げたように、まだ住む家もありませんので、国元から持ってきた家財道具は、漁場の網を入れる倉庫だとか米を入れる倉庫に格納したのですが、その倉庫から火が出て全部燃えてしまったのです。恐らく、開墾作業のために切った木を焼いていて、それが飛び火したのだと思います。移住者たちも寒いところへ行くという認識を持っていましたので、綿入れだとか布団だとかというものをたくさん持ってきていたようなのですが、そのほとんどを焼いてしまったのです。これから冬に向かうという時期になると、何とかしなければならぬということで開拓使からお金を借りて、夜具その他を補充しています。ある資料には、倉庫の中に火薬の樽が置いてあったために、消火活動もままならなかったと書いてあります。狩猟に使う鉄砲のために火薬を用意していたのだと思います。

お渡しした冊子の中には『北海道移住回顧録』と『移住顛末』という資料が入っています。これは、稲田家当主の稲田邦植という人の弟で、亡くなるまで静内に残ってリーダーシップをとった人が書いた資料です。その資料の中でこの火災について「折から西風激しく延々天を焦がし、さしもに大なる倉庫もわずか数時間以内に灰燼に帰せり。多数の移住民は追々寒天に向かい、衣なく夜具なく、その惨状実に名状すべからず。その損害もまた莫大ならん……」というふうに表現をしております。

この火災の後、「北の零年」にも出ていましたが、平運丸の沈没という事件がおきます。移住した年の8月のことです。第4番目の船になるのですが、平運丸という船を雇い入れ、215人の移住者、便乗者もいたようですが、その人たちが淡路島から静内に向ったのです。紀州沖に差しかけた時に海上が暴風雨になり、避難するため近くにある周参見の港に向かったのですが、亀岩という暗礁に乗り上げてしまいました。そのため83名が溺死してしまったのです。残った人たちは命からがら、もといいた淡路島に戻ったという事件がありました。この船には先発している移住者のための食料だとか、稲田家のいわゆる家宝のようなものも相当積んであったようで被害は甚大なものでした。

最初、稲田家は静内を支配する立場で来ていたようなのですが、その後、北海道の開拓は全部開拓使の所管により行うというように変わりました。そのため稲田家は支配者から、いわゆる一般の開拓民に立場が変わってしまったのです。その上、この平運丸の沈没というニュースを聞いた後続の人たちは、北海道移住に対しての意欲をすっかり失ってしまうという状況になったようです。

この沈没した船ですが、残っているデータによると、

長さ 50 間、幅 8 間とありますから、長さ 90m に幅 14m で、2 本煙突、3 本マストの鉄船です。これは薩摩藩が軍艦として使っていた船だったようです。この船の船長はこの後、責任を感じて周参見のお寺で割腹自殺を遂げたという記録が残っています。

当時の静内の風景ですが、この『北海道移住回顧録』によると、アイヌの人たちは静内川の沿岸に住んでいて、サケの干物とか鹿肉の干したものを常食にして、畑をつくることはなかったというふうにかかれています。ただ、これには誤解がありまして、干物もあれば生のもも食べていたはずですし、小規模ですが畑も作っていたと言われています。ヒエとかアワ、大豆、小豆など少しばかりのものは家の周辺に蒔いていたと言われています。

海岸には、根室の方に通じる小さな道があって、そこを通行する人がいました。内陸部はほとんど茅茨、樹林がうっそうとしていて、アイヌの人たちも上流下流を行き来する時は、川に沿って歩いていたようです。静内には目名川という川があるのですが、これは非常に蛇行した川なのですが、アイヌの人たちは、迂回を厭わないで川に沿って歩いていたようです。原始河川ですから、当然蛇行しますし、少しでも氾濫すると曲っていた部分が残されて沼になったりというような状況があったと思います。

従って、移住者は、まず、道路を開くことを始めます。川に小さな橋を架けて、見通しをつけるため草を刈り取るだけの道路です。しかし、樹林地なのでなかなかはかどらなかつたとあります。開墾も当時は人力だけで行われました。まだ、馬の力を使っていません。プラオが出てくるのもっと後のことなのです。鍬とか斧、鎌といった道具を使って人力で開墾したのです。

先ほど、農業の指導のためお百姓さんを 10 数人連れて来ているのですが、やる内容が全く違うのです。淡路では先祖伝来の田畑を耕して作物を育てるのですが、北海道に移住すると、雑草を刈り取るどころではなく、生える木を倒して、根っこを取って畑を作るところから始めなければならないのです。それも人力だけです。当時はブヨがたくさんいたのですが、移住者は袴をはいて、股立ちにたくし上げているので、袴のすき間からブヨが股ぐらにまで入ってきて食われたようです。そうしたこともあって、この年はほとんど開墾らしい開墾はできず、大根をわずかに蒔きつけた程度で終わったということが書かれています。

女、子供は魚場の倉庫を借りて住み、若い人たち、元気な人たちは仮設の小屋に住んで開墾作業を行うというような状況だったようです。その仮設の小屋は、キツネも楽に入れるような建物だったようです。もちろんキツネの他に熊もいました。アイヌの人たちは、別に熊を怖がっていませんでした。なぜかというと、犬を飼っていて、その犬が熊が来ると知らせてくれたからです。移住者には犬はいませんでしたので、やはり恐怖の的で、ア

イヌの人たちには大分助けられたということです。

住宅は、移住する時の条件で、朝廷側がいわゆる開拓費として、費用を稲田家にくれるのです。これにより、建物は組み立てるばかりに秋田県で加工して、それを静内に運んで建築したのです。「北の零年」では、脇差を差した武士が木を倒して、自分たちの殿様の屋敷を作るというシーンがありましたが、あんなのは全くのうそっばちで、あんなことをしていたら開墾なんかできないですね。開墾に専念するために、建物は費用を用意して専門の業者に建てさせたのです。ところが、建築の途中で開拓を開拓使が所管するようになりました。そうすると請け負った業者はどこからお金をもらっていいかわからなくなってしまいます。稲田家としては立場が変わったのだから金を出さず立場にないと言い、開拓使は稲田家からもらえと言うのです。これは裁判になり 10 年くらいかかって、結局最後は開拓使が全額出すはめになりました。

建物の大きさですが、やはり武士というのは、上下の位によって差をつけたがるものなので、いわゆる上の方の人は大きめの建物、3 間に 5 間で 15 坪の建物で、下の方の人たちは 2 間半に 4 間というように差をつけたのです。最初のうちは 2 家族で 1 軒の家に住むというような状況だったようです。

現在の静内は雪が少ないところなのですが、当時は結構多かったです。特に移住した年は多かったようで、日中外に出て家の中に入ると何も見えなくなるという、いわゆる雪目ですが、これには往生したようです。それから、薪だけはたくさんありますので、囲炉裏で薪を焚くわけです。そうすると煙で胸をやられたり、トラコーマのような眼病で失明するというようなこともあったようです。

私は、道庁赤レンガの中にある道立文書館で資料調査を行っています。静内関係の資料を抽出して解読しているのですが、その中に、夫婦と男の子 2 人、女の子 2 人の 6 人家族が目の病気に罹って、開拓使の出張所病院で治療をしたけれどはかばかしくない。それで、函館の病院に連れて行ったが、結局 3 人が失明してしまったという記録がありました。開拓、開墾をしなければならないところで目が見えなければどうしようもないのです。その家族は、生計の立てようがないということで、役所に願い出て故郷の淡路に帰ることにしました。故郷に帰ればあんなで生計を立てられると考えたのでしょう。

このような状況なのですが、学校は割りと早くできています。淡路では益習館という学校があったのですが、静内でも同じ名前の学校を作っています。後に永山長官の腹心と言われるようになる荒城重雄とか、後に開拓使の役人になるような人たちが学校の先生になっていました。

移住した年の 9 月に開校式を行ったのですが、建物は頓成寺のものでした。稲田家が移住する前の静内は芝の増上寺の支配下にあったために、頓成寺という寺が建て

られていたのです。稲田家の人たちは、明治維新の時に勤皇側についていました。それから明治維新のスローガンに「王政復古」ということもあり、彼らは神道で、お葬式も神式で行いましたので、お寺は要らないというようなことも書き残されています。お寺にはお坊さんがいたのですが、学校世話係を申しつけられています。俸給は1年分で米15俵と書かれています。この15俵は安いのではないかと思うのですが、この他に俸給についての資料は残っていません。

先ほど申し上げた荒城重雄はこの学校の校長になったのですが、その後、開拓使の12等出仕として役人の道に進んでいます。屯田兵になったのです。上川管内に永山という町名がありますが、この町名の由来になった永山武四郎、この人は屯田兵のトップの人ですが、荒城重雄はこの永山武四郎の副官になります。恐らく、静内出身というか淡路からの移住者の中で一番の出世頭ではないかと思います。

それから、岩根静一の実兄に三吉笑吾という人がいるのですが、洲本時代からのエリートの1人で、明治7年になると開拓使への出仕を命じられ、浦河詰めの刑法課兼簿書係として官吏の道のスタートを切りました。それから、今の北海道教育委員会の前身である開拓使の学務局のたった1人の専務職員となりました。その後、北海道を離れ明治22年には農商務省に入り、国の役人を歴任して兵庫県で亡くなっています。この人は、北海道の教育史の資料を見ると必ず名前の出てくる人です。

この荒城重雄と三吉笑吾という人は、ともに稲田家の医者で吉田元達という人の娘を嫁に貰っていて義理の兄弟ということになります。稲田家の家臣団から開拓使の役人になった人は、私の調査では20人を超えています。いろいろな縁故関係の採用があったのではないかと私は思っています。

当時は学校教育、学校というものは明治5年に公式に認められたものなので、まだ徹底されていませんでした。三吉笑吾は、学校の財政的な基盤を確立しなければならないということで、道内をあちこち巡視しています。そして、一般の人たちに、子弟に学校教育が大事なので必ず出して欲しい、金を出さないといい先生は来ないと言って説得して回るので。

その時の文章が残っていて、静内の学校では子供たちが馬に乗って通っていて、学校の敷地の中に乗ってきた馬を繋いでおく牧柵も用意されていると書かれています。そして、このような事例は、北海道の中でも稀なケースであると書いてあります。静内では道産子がたくさんいたために、このように馬を使っていたのだと思います。今で言えば、子供が自分で車を運転してきて、駐車場に車を置いて、勉強してまた帰るという形です。そのような形で馬を使うということは、学校に行っている間は馬1頭を家で使えなくなるということになります。それ

ができるくらい馬が豊富にいたようです。

稲田家臣団が来た時には、この馬がむしろ邪魔だったのです。せっかく耕した畑を荒らされてしまったからです。この馬を全部まとめて1つの牧場に入れてできたのが、開拓使の新冠牧馬場です。これが後に、宮内省の御料牧場になるのです。これには国も金を投入して、外国からいい種馬を買ってきて、馬の品種改良に努めたのです。現在、日高地方が競走馬の産地になった背景には、御料牧場があったということが大きな要因の1つとしてあげられます。この御料牧場では、アイヌの人たちも数人、牧馬取扱人として正式に採用されています。

宮内省の管轄の御料牧場になったことにより、皇室とか政府の高官も視察にくるということで、その歓迎のために植えられたのが二十間道路のヤマザクラです。これは現在でも私たちの目を楽しませてくれています。

はじめ、ハローとかプラオといった西洋式の道具を使われていなかったのですが、開拓使は西洋式の農耕を進めるため、農業現術修行人という制度を作りました。そして全道の開拓民に呼びかけ人を集め、1年間実習をしながら勉強をさせました。この人たちには後顧の憂いがないように給料を払って西洋式の農耕を学ばせたのです。真駒内にあった実習園でそうした実習をしてプラオなどの使い方を覚え、開拓地に帰り西洋式の道具を使った農業をはじめたのです。

「北の零年」の中にもトノサマバツタの異常発生シーンがありましたが、本当にバツタの被害はひどかったようです。このバツタは農耕の食物だけではなく何でも食べてしまうのです。そして空から来るので対処のしようがないのです。タモ網ですくって穴に埋めたり、火をかけて焼いてしまうということもしたようです。開拓使では、1升捕ると5銭か6銭で買い上げたという記録もあります。この時にはアイヌの人たちも飢餓状態になるほど、食物が食い尽くされたという記録が残っています。

先ほども申し上げましたが、稲田家臣団は明治維新のスローガンを忠実に守っていて、初代の天皇である神武天皇を祀る神社を作ったということもあります。

「北の零年」の中で、戸籍を作れば扶持米が貰えるというように、「扶持米」という言葉が何度も出てきます。ところがあれは真っ赤なうそなのです。扶持米ではなく「扶助米」なのです。この扶助米は、生活扶助の意味で開拓使が移住者に支給したもので、稲田家臣団も実際に貰っていました。映画では、かつての武士が殿様から俸禄として受け取っていた「扶持米」という言葉を使ってしまったのです。台本には無かった言葉なので、私もチェックのしようが無かったのですが、試写を見ると扶持米、扶助米と何度も出てくるので、私はプロデューサーに「これは、まずいよ」と言ったところ、吹き替えをしましょうということになりました。ところが、「扶持米」としゃべっている俳優をピックアップしたところ渡辺謙さんだけが日本にいないのです。「バットマン」の撮影の

ためにアメリカに行っているというのです。そのため、1人だけ吹き替え要員が集まらないのです。それで、どうしようもないので、これは目をつぶりましょうということになりました。多くの人に喜んでもらう映画を作るには、かなりのうそが必要なんだということを痛感しました。

静内には、開拓記念に關係する碑があちこちに建てられています。また、静内の道路縁にはアカマツの木が生えていますが、このアカマツは移住者が植えたものです。昭和30年代を過ぎた頃からあちこちで枯れてきていますが、北海道百年の時には「百年のアカマツ」ということで、開拓關係の記念物として道の指定を受けているものです。アカマツは北海道に自生しているものではないので、誰かが持ってきたものなのです。静内町史によると、明治6年に浅川義一さんという人の母親が北海道に渡る時、稲田家の令嬢の陽子^{はるこ}という人の供をしていて、途中で岩手県の三本木に滞在した時、この陽子の発案で2人が三本木の松かさを袂に入れて静内まで持ってきて、それが発芽したものを移住者に分け与えたと書かれています。

私は、これは変だと思いました。「松かさ、たもてに入れて」と書くと、ロマンチックな表現で格好はいいのですが、種が入っている時期の松かさを袂に入れると汚れてどうしようもないと思うのです。松ヤニでべたべたになってしまうと思うのです。そうならないカラカラになった松かさは種が外に出たもので、中に種は入っていないはずなのです。効率よくアカマツを持って来ようと思ったら、種だけ持ってくればいいと思うのです。また、岩手県に三本木というところが本当あるのかということですが、これは浅川さんのおじいちゃんから聞いた話として出ているので、裏づけ調査をする必要があると思いましたが、文献を探したのですが、無かったので一番簡単な方法で地図帳を調べてみました。すると岩手県の奥州街道筋に十三本木町という町はあったのですが、三本木町は見つけられませんでした。青森県北上郡と宮城県吉田郡には三本木町があったのですが、これが該当するのかがどうか分かりませんでした。裏づけがとれなくて困っている時に、用事があって隣町の新冠町の郷土資料館の学芸員のところに行きました。すると、ちょうど古文書の目録を作っているところで、私も見せてもらいました。それを見ると先ほど言いました浅川家の文書だったのです。その資料は浅川義一さんの父親の繁さんが、実際に静内から洲本まで歩いた時のメモだったのです。資料を見ていくと、静内郡から新冠郡まで3里、沙流郡まで6里で、9里歩いて1泊したという形ですと書いてあるのです。最後は東海道を通過して、この三本木と松かさを持ってきた三本木が同じかなのかということはありませんが、この三本木は青森県の三本木に間違いのないのです。

浅川繁さんは、明治4年にお兄さんと一緒に淡路島か

ら静内に移住しています。このメモは浅川繁さんが明治6年3月28日に静内を出発して、洲本を目指して歩いた時の記録です。これを見ると、通過した地名、距離、宿泊地が書いてあって、淡路島まで49日をかけて1人で歩いて行ったということが分かります。ただし、東海道から先は地名は入っていますが、距離は省略されています。昔は参勤交代があって江戸まで行くことがあったでしょうし、東海道については五十三次などの資料も出版されていたので、書かなくてもわかるだろうということで書かなかったのかもしれませんが。

稲田家の令嬢陽子について調べてみました。稲田家当主の稲田邦植^{くにたね}、後に男爵になるのですが、その邦植の妹で太陽の「陽」に子で「はるこ」と言います。後に北大の初代総長になった佐藤昌介の奥さんになった人です。この稲田陽子も静内に移住するという形になるのですが、私の推測ではありますが、当主の妹が海を渡って北海道に移住することが決まって、その出迎えと道案内のために29歳の浅川繁が淡路の洲本まで行ったと考えるのが妥当ではないかと思いました。令嬢陽子が北海道に来るためには、壮年の男性が迎えに行き道案内する必要があります。お付きの女性も必要になってくるのですが、このお付きの女性が後に浅川繁さんと結婚した喜久代さんです。初めから結婚の約束ができていたのか、旅の途中でそうなったのかは分かりませんが、こう考えるのが一番自然なのではないかと思いません。

浅川繁さんは、明治6年5月15日に洲本に到着しています。明治6年というと平運丸が沈没した事件から2年近く経っているのですが、船に乗って海路でという気持ちは無かったのだと思います。そんなおっかない旅はしたくないということで時間をかけてでも自分の足で歩いたのだと思います。詳細な記録は令嬢陽子の道案内をするための参考にするために作ったのだらうと思います。5月15日に洲本の到着した浅川繁は、女性2人の支度が整うのを待って、初夏の洲本を発って東海道、奥州街道と辿って北上します。途中で、再び見ることできないかも知れないということで、日光とか松島というような名所に寄りながら旅をしているのです。そして、函館に渡り静内に至ったのだらうと思います。

北の寒さ、冬を体験してる浅川繁が、冬、あるいは晩秋を目掛けて旅行するというのは考えられませんが、2人の女性のお供をしての復路は、男1人の往路よりも日数がかかったと思います。

奥州街道の三本木、現在の十和田市の中心部に位置していたと言われていますが、ここで松かさが実っているのを見つけたのではないかと思います。今でもそうですが、松の種は売っていますので、この時も購入したのではないかと思います。袂に入るくらいの松かさからあれだけの数のアカマツが芽生えたとは考えられないか

らです。稲田家は、かつて赤松という姓を名乗っていた時代もあり、松は稲田家のシンボルということで洲本にいた時から大事にしていたようです。

浅川家の文書の中に1枚もので「御扶持米金拝借之儀に付奉願書」というものがあります。所帯を持つと、その奥さんの分まで米を貰えるのですが、そのためには文書を出さなければならなかったのです。この奉願書には「名東県管属土族堀江小十郎妹昨八日私妻に賞請候処送籍状跡より差越管御座候間夫れ迄之処御扶助米金並之通拝借被仰付度此段奉願候」とあります。名東県の土族堀江小十郎の妹を昨八日、私の嫁に貰うけた、奥さんの戸籍は洲本にあるので、それが届いたら改めて届けを出すので、それまでの間、他の人と同じように扶助米をくださいというような文章です。これには副戸長の古川澤郎という人が「前書のとおり願入れ取り調べ候のところ、事実相違なくござ候」ということで、開拓使宛への添え書をしています。

偶然このような文書が見つかって、私の疑問が一つ解けたのです。話としてはでき過ぎた感があるのですが、たまにこういうようなこともあるのです。

今日は『北海道移住回顧録』から、内容をかいつまんで紹介しましたが、お渡しした冊子の中には、浅川繁の奥さんのお兄さんにあたる堀江小十郎という人が書いた文書もあります。そこには、北海道に来てからのことだけではなく、洲本にいた時のこと、明治3年の庚午事変、俗に稲田騒動といわれていますが、この騒動の問題についても書かれています。

稲田家は非常に家臣が多い形になっているのですが、中には武士階級なのだろうかと思うような人も含まれています。というのは「片扶持」と書かれているのですが、殿様から用事があって呼びつけられた時にだけ、出て行って言われた仕事をするかわり、その分の年貢を負ってもらうという階級の人もいたようなのです。そうした人も家臣の数に含めているのです。そのため、随分、家臣が多いように書かれている資料もあります。

それから、地名についてですが、ご承知のとおり北海道の地名のほとんどはアイヌ語の地名です。はじめはカタカナで書いて表記していたのですが、しだいに読み方が似ている漢字を当てはめて表記するようになりました。そのため、最後には、もとのアイヌ語が分からなくなり、地名の意味も分からなくなってしまうという流れがあります。これは北海道ばかりではなくて、私は北方領土にあった神社の調査をしたのですが、向こうでも同じような状況でした。カタカナ表記から漢字表記になっていくというのは同じような状況です。

静内でも、稲田家が入ってきた時に、いろいろなアイヌ語の地名をそのまま生かす形で漢字の地名をつけてきました。例えば「下方」ですが、もともとのアイヌ語地名では「ケパウ」と言って、カラス貝がたくさん取れる川という意味です。この流域を上中下というように地

域で分けて、「上方」「中下方」「下方」というような具合です。

この他にも「自名」とか「遠仏」、「春立」などのような地名も、それぞれ地名のいわれを持っています。例えば「春立」は、アイヌ語で「ハルウタウシナイ」と言っていて、食べ物がたくさんとれる沢という意味があります。

こうした地名の中で、どうしても意味に分からない地名が2つあります。1つは「佐妻」です。伝承によると、昔、大津波でサメが打ち上げられたところと言われているのですが、本当にそうなのだろうかというくらい、山の奥の方にある地域なのです。もう1つは「婦蟹」ですが、これもよく分かりません。

「静内」という地名もよく分からないのですが、公式には「シフチナイ」と言われていて、「シ」が「本当の」とか「まことの」、「フチ」が「おばあさん」という意味で、「シフチ」で「曾祖母」となります。「ナイ」は「沢」なので「曾祖母の沢」という意味になります。その沢は割と小さな沢なのですが、そこは弁財船が来た時に船を着けられるような入り江になっていて、そこに静内会所が置かれていたことから「静内」という地名になったと言われています。静内という地名は北海道内の他の地域を探して見てもありません。

アイヌ語の地名や川の名前を調べていくと、例えば「モンベツ川」などは、静内に「捫別川」がありますし、日高にも「門別川」があります。また、北見の方にも「紋別川」があります。このように当てた漢字は違いますが、もとのアイヌ語が同じという地名はたくさんあります。しかし、静内の真ん中を流れているシベチャリ川ですが、これと同じ地名は国後島に1カ所だけ見つけましたが、他にはありません。何で他にないのかということですが、いろいろな説があって困っています。いずれにしても静内の地名は他の地域に比べると変わっていると言うことができます。

縄文時代の遺跡を見ても、静内川が文化圏の境になっています。また、アイヌの人たちの文化にしても、静内川の右岸と左岸で墓標の作り方が違うということもあります。したがって、昔から静内川は文化の境目になっていたのだと思っています。

寛文九年蝦夷の乱、いわゆるシャクシャインの戦いですが、門別の八エの首長のオニピシと静内の東側のシャクシャインの戦いがそもそものきっかけだったと言われています。古い資料を見ると、静内川から八エ川の間が空白地帯になっていると書かれているものがあります。他に『津軽一統志』などを見ると、静内川を境にして、シャクシャインが海岸線、オニピシが静内川の上流の方をいわゆる縄張りにしていて、遡上するサケの漁業権や鹿や熊の狩猟権というようなもののぶつかり合いが、そもそもの戦いの引き金になったというふうに思われます。

この戦いの5年くらい前になりますが、有珠岳の大

噴火があって日高方面にも大量の火山灰が降りました。今でも地面を掘ると20～30センチくらいの厚さで火山灰が残っている場所があります。山の上に降った火山灰は、雨が降るたびに低いところに向かって流れ出し、毎年のように大損害を与えたと考えられます。例えば、アイヌの人たちの重要な食料の1つだったウバユリなどは、球根からでんぷんをとって食料にしていました。このウバユリは花をつけるまで数年かかる植物で、食料にするのは花が咲く前のものですが、この噴火により大きな影響を受けたと思われます。また、他の動植物にも影響があったと思われ、大変な食料危機の時代だったのではないかと考えられるのです。そのため、自分の縄張りを超えてでも食料調達をしなければならなかったということが、そもそもの引き金となって、それが松前の和人との大きな戦いになっていったのではないかと考えています。

少し話が余計な方にそれてしまいましたが、今日はこの辺で終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございます。(拍手)